138

小児に対する軟骨伝導補聴器試聴症例の検討

○江崎友子¹⁾, 木下稚子¹⁾, 柴田知紗¹⁾, 服部 琢¹⁾, 浅見勝巳²⁾, 工藤祥子²⁾, 笠原伸洋²⁾

1) あいち小児保健医療総合センター 耳鼻いんこう科,

2) あいち小児保健医療総合センター 言語聴覚科

【はじめに】

軟骨伝導補聴器は耳軟骨を振動させて音を伝える。2017年11月に発売され、当院でも2020年4月より小児への装用相談を開始した。1年間での対象例は10例であった。

【目的】

対象となった10症例につき装用に至った／至らなかった経過を検討し、その背景を見直す。

【方法】

軟骨伝導補聴器が適応と考えられる児・保護者に対し実物をみせて説明、希望者には振動子（単体タイプ）で試聴、聴力検査を行い、適応例はイヤチップを作成し再度試聴、装用するかどうか相談を行なった。聴力レベルは3分法で示した。

【結果】

(A) 装用に至った6症例 難聴の型（聴力・dBHL；右／左）／年齢／現HA／相談の契機／決定理由

(1) 両側伝音（66.7/31.7）／7y3m／気導／定期診察／補聴器更新

(2) 両側伝音（63.3/70）／8y6m／気導／定期診察／補聴器更新

(3) 一側混合（11.7/100）／7y11m／なし／就学時健診、近医より紹介／学校で装用

(4) 一側伝音（71.7/6.7）／9y1m／なし／転居、聴覚管理目的／学校で装用

(5) 一側伝音（15/66.7）／10y0m／なし／近医小児科から紹介／学校で装用

(6) 一側伝音（81.7/10）／14y5m／なし／近医定期受診の際、紹介／学校で装用

(B) 装用に至らなかった4症例

(1) 両側伝音（70/68.3）／15y3m／骨導／BAHA適応の相談／音量感不足

(2) 両側伝音（75/48.3）／7y7m／骨導／定期診察、補聴器更新／音量感・取扱い

(3) 両側伝音（75/80）／5y8m／気導／定期診察、補聴器更新／取扱い

(4) 一側伝音（8.3/70）／6y0m／なし／就学時健診、近医より紹介／困っていない・取扱い

【考察】

元々気導補聴器を装用していた症例では、試聴後すぐにはなかったが更新の際に希望が出された。骨導補聴器装用例では、装用効果はほぼ変わらないものの、音量感の面で不足を訴え決定には至らなかった。一方、一側難聴例の殆どは試聴の時点で満足度が高かった。装用したい場が学校であり、児自身で管理できること、つまり脱着の簡便さも大きなポイントで、作成できる状態であった症例では全例イヤチップ型を希望した。両側外耳道閉鎖などで補聴器を装用している場合は更新等で再診する機会があり、その際に軟骨伝導補聴器という選択肢を提示することができる。一方、一側難聴児の場合、両耳聴であれば言語獲得に大きな支障はなく、良耳聴の聴力管理がメインとなり、今までは就学に合わせて地域の耳鼻咽喉科へ転医していた。その後、情報を得て再診する場合もあるが、細かな情報提供はされにくくなるため、今後は就学後も数年は定期的な再診をアナウンスするべきと考えている。実際に学校生活を過ごさないとわからないことも多く、どのような場面で困るのか、聞き取りを向上させたいと考えるのか、が明らかになり、自己管理も可能な8-10歳がスムーズに適応・移行できる時期と考えられた。

【まとめ】

病態的に軟骨伝導補聴器が適応であること、児自身が必要と感じ、取扱いができる時期・年齢での提案が有効である。